文献紹介

アプトニオス『プロギュムナスマタ』

（翻訳と解題）

堀尾　耕一

解題

アプトニオスは4世紀後半から5世紀初頭にかけて活動した、アンティオキア出身の修辞学者である。写本の欄外注記によれば、彼はリバニオスおよびバスガニオスの弟子であったといい、実際、師リバニオスが彼に宛てたとされる手紙が伝わっている。それによると、アプトニオスはアンティオキアから遠く離れた土地で青年教師として活躍し、多くの著作を手がけていたらしい。このうち現存するのは、ここに紹介する『プロギュムナスマタ』、および彼の名のもとにまとめられた40篇からなる『寓話集』のみである。「寓話」はプロギュムナスマタを構成する課題のひとつであることから、後者はその模範作文の集成ではないかとの推測もなされている。また、9世紀のポティオスは彼の『模擬弁論』を読んだとの証言を残しており、さらに『スーダ』の記述は彼がヘルモゲネスの修辞学書に注釈を施したと伝える。これらの限られた情報からも、アプトニオスが弁論教育に深く関わる立場にあったことが推察されよう。なお、中世の伝承においては、彼をrhetor（修辞学者）と呼ぶことは稀で、多くの場合sophistes（ソフィスト）という称号が与えられている。

ローマ帝政期には、本格的な模擬弁論（デクラマティオ）の作成に先立って一連の予備的な課題を修めることが、ひとつの教育課程として定着していた。プロギュムナスマタとは文字通りこうした「予備訓練」を意味し、また、その名で呼ばれる教科書的著作がいくつも存在したらし

い。このうちアプトニオスの『プロギュムナスマタ』は、課題ごとに理論上の要点を示したのちに、その教則に従って書かれた模範作文を収録している点が、その構成上の大きな特徴となっている。この他にも、個々の課題についての理論的要諦のみを示した文献として、テオン（1世紀）、ヘルモゲネス（2世紀）、ニコラオス（5世紀）のものが現存する。この教程を構成する諸課題はある時点で固定化されたらしく、課題の数および順序は、伝存するいずれのプロギュムナスマタ文献においてもほぼ変化がない（ただし、最初期のテオンにはいくつかの例外がある）。したがって、アプトニオスが先行する複数の文献を参照したことはまず疑いえないところだが、とりわけヘルモゲネスに帰される著作との間には、定義の文言や例の挙げ方など、多くの類似点が認められる。ただ、今日に伝わるのはかつて存在した文献群のごく一部である以上、特定の著作との関係を断定的に論じることは難しい。これらの理論書とは別に、教則に準拠した模範作文だけの集成が、リバニオスの名のもとに伝えられている。この著作がアプトニオスに直接的な影響を与えていることは、内容の類似性からも、また上述のような師弟関係からいっても、ほぼ疑う余地はないだろう。

個々の課題についての簡潔な教則とそれに準拠した模範作文、おそらくはこうした体裁が重宝された結果として、ある時期以降、ビザンティウムにおいて『プロギュムナスマタ』といえば、このアプトニオスの著作を指すことになった。まずその教則の部においては、それぞれの課題がいくつかのタイプに類別されたうえで、実作上の要諦が、押さえるべき項（kephalaion）を列挙するかたちで提示される。これに続く模範作文は教則に沿った例題としての性格が強く、近世以降の刊本でも、本文に対応する諸項が欄外に示されている場合が多い（ただしRabe版はその限りではない）。たとえば第三番目の「要録」でイソクラテスの教育論を扱っている例題ならば、この部分が＜称賛＞、次の段落は＜敷衍＞、それから次は＜根拠の提示＞、といった具合である。つまり、この著作によって提供されているのは、教則に忠実でありさえすれば誰にでもひとつづき

の文章が作れるような know-how にほかならなかった。

学校教育の現場において、このアプトニオスの教科書をもとに、様々な応用問題が与えられたことは想像に難くない。実際、中世のビザンティウムでは、原典にはないキリスト教的な題材を扱った作文練習がひろく行われていたことが知られている。そして驚くべきことに、こうした営みは、ルネサンス期に登場したラテン語版アプトニオスを経由して、近世ヨーロッパにおける修辞学教育の場においても、ほぼそのままのかたちで受け継がれることになるのだった。たとえば 17 世紀後半にイエズス会士 Francisco Pomey によって著された *Novus Candidatus Rhetoricae* には、「要録」の模範作文に、「聖フランチェスコは言葉ではなく行いによって説教すべく、同志と共に町中をくまなく歩いた」といった例題を見出すことができる。また、カエサルの「称賛」と並んでヒエロニムスやアウグスティヌスら聖人の「称賛」が、練習問題として扱われてもいる。これらの事実は、プロギュムナスマタの応用範囲の広さを物語る、よい証左となるに違いない。

いま、仮に「作家の個性」という言葉を持ち出すならば、アプトニオスの『プロギュムナスマタ』は、そうした価値観の対極に位置する著作であると評すほかないだろう。けれども、古典期以来の長い年月にわたる修辞学教育において培われた知恵の、ひとつの結実としてこのアプトニオスがあり、そしてそれ自体が一千年以上にわたって学校教育の場で教科書として読まれ続けたという事実に思いを致すとき、固有名詞の次元を超えた、この著作の有する普遍的な性格が、にわかに輝きを帯びて見えてくる。これをやや誇張して言うならば、ひとが説得し説得されることのメカニズムが、この書物において、いわば最大公約数のかたちをとって提示されている、ということになろうか。

翻訳にあたっては、次の校訂版を底本とした。

H. Rabe, *Aphthonii Progymnasmata*, Leipzig, 1926.

また、以下の著作を参照した。

I. M. Catanaeus, *Aphthonii Praeexercitamenta*, Paris, 1531.

R. Agricola, *Aphthonii Progymnasmata*, Köln, 1539.

R. Agricola, I. M. Catanaeus [R. Lorichius ed.], *Aphthonii Progymnasmata*, Frankfurt, 1578.

H. Rabe, *Ioannis Sardiani commentarium in Aphthonii Progymnasmata*, Leipzig, 1928.

G. A. Kennedy, *Progymnasmata: Greek Textbooks of Prose Composition and Rhetoric*, Leiden, 2003.

なお、訳者による次のような論文がある。

堀尾耕一、「プロギュムナスマタ文献の伝承について」、『フィロロギカ』1 (2006 年)、1–17。

アプトニオス『プロギュムナスマタ』

目次

1 寓話 [μῦθος: fabula] 51
習性型の寓話「蝉と蟻、若者たちへの労苦の勧め」

2 語り [διήγημα: narratio] 51
薔薇についての語り、戯曲風

3 要録 [χρεία: chria] 52
発話型の要録「イソクラテスは、教育の根は苦いがその実は甘い、と言った」

4 格言 [γνώμη: sententia] 54
勧奨型の格言「貧乏を逃れようとあらば、キュルノスよ、口を開いた大海へと、切立つ岩場からなりと飛び降りよ」

5 論駁 [ἀνασκευή: restructio] 56
論駁「ダプネにまつわる話が道理にかなっていないこと」

6 確証 [κατασκευή: confirmatio] 59
確証「ダプネにまつわる話が道理にかなっていること」

7 汎用の論法 [κοινὸς τόπος: locus communis] 61
独裁者に対する汎用の論法

8 称賛 [ἐγκώμιον: laus] 65
トゥキュディデスの称賛
知恵の称賛

9 中傷 [ψόγος: vituperatio] 69
ピリッポスの中傷

10 比較 [σύγκρισις: comparatio] 72
アキレウスとヘクトルの比較

11 **性格づけ** [ἠθοποιία: ethopoeia] 74
性格づけの演習「子供たちが死んだとき、ニオベはどんな言葉を発するだろうか」
12 **描写** [ἔκφρασις: descriptio] 76
アレクサンドリアの神殿およびアクロポリスの描写
13 **一般論題** [θέσις: thesis] 79
一般論題「結婚すべきか」
14 **法案** [νόμου εἰσφορά: legislatio] 83
姦通現行犯はその場で殺されるべしとする法律の非難

1 寓話

寓話はもともと詩人たちに始まるが、その忠告的効果から弁論家の共有するところとなった。

寓話とは、真実に似せた作り話である。

シュバリスもの、キリキアもの、キュプロスものなどと、考案者に応じて呼び名を変える。とりわけアイソポスものと呼ぶことが優勢だが、それはアイソポスがほかの誰より見事に寓話を書き留めたことによる。

寓話には、発話型、習性型、そして混合型がある。発話型では何かを行う人間が設定されるが、習性型のほうは言葉を持たぬ動物の習性を描写する。混合型はその両方、動物と言葉とによる。

寓話が生まれる所以となった忠告をあらかじめ前に据えるなら寓話の前置き、終わりに持ってくるなら寓話の結びと呼ぶ。

習性型の寓話「蝉と蟻、若者たちへの労苦の勧め」

夏の盛りとなった。蝉たちは甲高い歌を奏で始めた。けれども蟻たちには労役と、それから収穫とがやって来た。それをもとに、冬の間を食べていくはずなのだった。冬になると、蟻たちは苦労して得たもので暮らした。が、もう片方の者たちの愉しみは、貧窮のために終わった。

このように、労を厭う若者は、老いて憂き目を見ることになる。

2 語り

語りとは、あったこと、もしくはあったとされることの説明である。

語りが叙述と異なるのは、ちょうど歌章が詩編に異なるのと同様だ。詩編は「イリアス」の全体だが、歌章は「アキレウス武具用意の段」をいう。

語りには、戯曲風のもの、歴史的なもの、そして市民的なものがある。

戯曲風とは虚構のものであり、歴史的とは過去の出来事を説明するもの。市民的とは、法廷において弁論家たちがそれを用いるようなものである。

語りに伴うのは六つ、何かを為す人物、為された出来事、それはいつ、どこで、どういう仕方で、どんな動機からなのか。

また、語りの特質は四つ、明快さ、簡潔さ、説得力、そして言葉遣いが純正なギリシア語であること。

薔薇についての語り、戯曲風

薔薇の美しさに感嘆する者は、アプロディテの衝撃を思うがよい。女神はアドニスに恋していた。けれども戦神アレスが、女神のことを慕っていた。女神がアドニスに抱いたものは、そのままアプロディテにアレスが抱いたそれだった。神は女神を求め、女神は人間を追った。たとえ生まれが違っても、焦がれる想いに別はない。嫉妬に駆られたアレスは、アドニスを始末しようと思った、アドニスの死こそは恋の解決、と考えて。そしてアレスはアドニスを打ちのめす。一方、女神は事態を知って、急いで防ごうとしたものの、慌てたあまり薔薇へと突っ込み、その棘につまづいた。そして足の裏に、それを突き刺してしまう。けれどもその傷口から流れ出た血は、薔薇の色をそれ特有の見かけに変えた。もとは白だった薔薇が、いま目にするそれとなったのだ。

3 要録

要録とは、ある人物をまさしく想起させるような、簡潔な覚えである。為になるので、要録と呼ばれる。

要録には、発話型、行為型、そして混合型がある。発話型は、為になる事柄を言葉によって明かす。たとえば「プラトンは、美徳の若枝は汗と労苦によって成長する、と言った」。行為型は、行為のしるしを示す。たとえば「ピュタゴラスは人間の一生はどれくらいかと尋ねられたとき、顔

をちらりと見せてから隠し、その残像を人生の尺度とした」。混合型はその両方、すなわち言葉と行為とによる。たとえば「ディオゲネスは不心得な若者を見かけたとき、その養育係を小突いて、どうしてそんな教育をするのか、と言った」。

さて、ここまでが要録の類別だが、それを実作するには以下の諸項をもってする。すなわち、称賛、敷衍、根拠の提示、反対の想定、比喩、実例、先人の証言、簡潔な結びである。

発話型の要録「イソクラテスは、教育の根は苦いがその実は甘い、と言った」

イソクラテスを、その弁論の術ゆえに称えるべきだ。それで美名をおおいに輝かせた彼は、その術の可能性を丹念に示してみせた。そして、技術を広めて、自分をそれで押し広めることはなかったのだ。さて、王侯のそれぞれに法を策定し、あるいは助言することで、彼が人々の生活をどんなに向上させたか、それを論じ尽くせば長くなろう。が、教育について彼がどのように考察したのかを、ここに述べてみたい。

彼は主張する。「教育は労苦を愛し求めることに始まるが、しかし苦しみが終われば喜びとなる。」こう彼は考察したのだが、以下、順を追ってそれを称えていこう。

なるほど、教育を望む者は、教育の導き手たちのもとで試される。彼らのもとに出向くのは怖い、といって、放棄するのはいかにも愚かである。子供たちにはいつでも恐怖が生じるのだ、そこに居合わせても、あるいはぐずぐずしていても。教師に代わって今度は養育係が現れる。見た目にも怖そうだけれど、折檻を加えるとなれば余計に恐ろしい。試練よりも先に恐怖が訪れ、恐怖の次には仕置きがやって来る。子供たちの過ちを彼らは追求し、正しいはずの事柄を判断する。この養育係にもまして、父親はさらに厳格に、道を吟味し、先を行っては指図し、広場に不審の眼差しを向ける。罰が必要とされる場合にも、彼らがその本質を踏まえて

いるわけではない。それでも、そうした中にある子供は、成年に達して美徳を身にまとうことになる。

そこでもし、いま誰か恐れをなして教師から逃れ、父親を避け、養育係に背くのであれば、彼は言葉をまったく身につけず、恐れとともに言葉をも剥ぎ取られることになったろう。じつに、それらのすべてが、イソクラテスの考えをして教育の根を「苦い」と形容するよう促したのだ。

たとえば土を耕す者は、苦労して大地に種を蒔くけれど、より大きな喜びをもってその稔りを収穫する。それと同様、教育を求める者は、苦労することでその先に来る名声を手に入れる。

デモステネスの生き様を見るがよい。どの弁論家にもまして労を厭わなかった彼が、誰よりの名声を博することになった。事実、彼の持ちあわせた熱意はその頭を飾るものさえ取り去るほどだったけれど、それも美徳による飾りこそ最上と信じてのこと。人々が楽しみに費やす分までも、彼は労苦に充てたのである。

そこで、ヘシオドスを称えなくてはいけない。徳の道は険しいがその頂は歩きやすい、と彼は言った。まさにイソクラテスと同じ考えを追究していたことになる。つまり、ヘシオドスが道と説いたところをイソクラテスは根と呼んだわけで、言葉こそ違えても両者はひとつの考えを表明しているのだ。

これらを見て取ったうえで、教育について最上の考察をなしたイソクラテスを、称えるべきだろう。

4 格言

格言とは、何事かを勧め、あるいは思いとどまらせる、説き明かすに要を得た言葉である。

格言には、勧奨型、訓戒型、そして言明型があり、さらに、単純型、複合型、人のうなずくもの、真実味のあるもの、誇張的なものがある。まず勧奨型とは、たとえば「客人はその場にいるかぎり大事にし、そして望め

ば送り出してやるのがよい」。訓戒型とは、たとえば「人を束ねる人間が夜通し寝るのはよくないこと」。言明型とは、たとえば「財は不可欠。それなくしては必要なことの何ひとつ成されえぬもの」。単純型とは、たとえば「唯一にして最善の吉兆、それは祖国を守って戦うこと」。複合型とは、たとえば「棟梁多くして善いことなし、棟梁は一人とせよ」。人のうなずくものとは、たとえば「似たものどうし共に居て楽しむ」。真実味のあるとは、たとえば「何びとも苦のない人生を見ることはない」。誇張的とは、たとえば「大地が養うもののうち人間ほど弱いものはない」。

さて、ここまでが格言の類別だが、それを実作するには要録のそれと同じ諸項をもってする。すなわち、称賛、敷衍、根拠の提示、反対の想定、比喩、実例、先人の証言、簡潔な結びである。要録と格言との違いは、要録はときに行為型をとるが格言はつねに発話型であること、また、要録は人物を必要とするが格言は人物なしで終始することによる。

勧奨型の格言「貧乏を逃れようとあらば、キュルノスよ、口を開いた大海へと、切立つ岩場からなりと飛び降りよ」

詩作の営みが批判にさらされるのを許さなかったテオグニスは、寓話のかわりに勧奨の言を編みだした。詩人たちが作り話に重きを置くのを見て、寓話を斥けながら、人生いかに生きるべきか、その教えを韻文にまとめたのだ。詩の美点を追求すると同時に、教えの有益性をそこに取り入れたわけである。多くの点からこのテオグニスを称賛できるはずだが、わけても貧窮をめぐる彼の考察は、その筆頭に挙げられよう。

いったい、彼は何を主張するのか。「貧乏にとりつかれた者は、いっそのこと死ぬがよい。太陽に恥をさらすくらいなら、あらかじめ人生から退くほうがよほどましだから。」こう彼は考察したのだが、それがどれだけ見事なものか、以下に見て取れるだろう。

なるほど、貧乏と共にある者は、そもそも子供時代には徳の修練を積むこともなく、成年に達すればけしからぬ業のかぎりを尽くすに違いない。

使節に立てば金銭で祖国を裏切り、公の場では金を目当てに弁舌を振るい、裁定の任に当たろうものなら賄賂を受けて票を投ずることになる。

だが一方、貧乏を遠ざけている者たちはといえば、そういうことはまったくない。子供の頃にはいちばん適切なことを修め、成人すれば万事を立派にやってみせる。祭りのためには合唱隊を提供し、戦時にあっては資財を供出するのだ。

たとえば厳つい鎖に拘束された者にとって、その鎖が行動の妨げとなる。それと同様、貧乏に取りつかれた者にとっては貧しさが、自由にものを言うことを妨げる。

イロスを見よ。彼はイタケに生まれながら、国家の一員として皆と同じだけの富に与ることがなかった。それどころか、彼の貧窮ぶりは尋常でなく、貧しさのせいで呼び名まで変えられたほど。もとはアルナイオスと呼ばれていたのをイロスという名前にされたわけだが、もらったそのあだ名は「使い走り」にちなんでいたのである。いや、そもそもイロスなどを持ち出す必要があろうか。イタケの王オデュッセウスにして、みずからの故郷に上陸するにあたって貧困を装ったばかりに、貧しさの災厄に与った。自邸にあって物を投げつけられ、侍女たちにまで罵られたのだ。これほどに、貧乏は、人にそれと思われるだけでも耐え難いことなのである。

そこで、エウリピデスを称えなくてはいけない。持たぬことは禍い、と彼は言った。生まれの良さもよく貧窮を転じえない、とも。

こうしたわけで、貧しさについてこれほどの考察をしたテオグニスを、それに見合うだけ充分に称えることがどうしてできようか。

5 論駁

論駁とは、ある提示された事柄を覆すことである。

論駁の対象となるのは、あまりに自明だったり、もとより成立不能なものではなく、その中間に位置するような事柄だ。

論駁を行うには、まずその主張を立てている者に対する非難の言葉を述べ、ついで当の問題についての説明を置く。そして、以下の諸項を押さえることが必要となる。まず、不透明さ、不可解さ、さらには不可能性、矛盾、不適切さ、おしまいに、無益さへの言及。

この予備課題は、それ自体に弁論術の力を余すところなく含んでいる。

論駁「ダプネにまつわる話が道理にかなっていないこと」

詩人たちに異論を唱えるのは筋違いなことではあろう。が、しかしいま、彼らのほうから自分たちに反論するよう焚きつけている。神々に対して、不遜にもこんなことを詩に語っているのだから。かたや神々のことを彼らが何とも思ってないのに、こちらのほうでは詩人たちに一目置くとは、どうして筋の通った話になるだろう。実際、神々のうちのどなたが侮辱されたのであっても、私としては心を痛めたはずだ。けれども、アポロンについてはことのほかである。その神が自分たちの技芸の先導者だとみずから創作しておきながら、ダプネにまつわるアポロンの神話を、彼らはこのように語っているのだ。

それによると、ダプネは大地の女神ガイアと河神ラドンとから生まれた。そして際立ったその容姿ゆえに、アポロンが彼女に心惹かれることになったという。恋する神は追いかけたが、追ってもついに捉えることはなかった。けれども大地の女神がその娘を迎え入れると、少女と同じ名前をもつ花、月桂樹を生み出し、さらには姿を変えたそれに誉れを授けた。その樹は月桂冠となって、逝ってしまった少女への憧憬ゆえにアポロン神殿の三脚鼎に添えて納められ、またその枝は神託のしるしとされる。ここまでが、彼らの語るところの神話である。そこで、以下順を追って、その難点を明らかにできるはずだ。

ダプネはラドンとガイアから生まれたという。いったい、その出生の証拠は何か。彼女は人間で、両親の生まれはそれとは別だったというのなら。また、ラドンはどうやってガイアと一緒になったのだろう。河の

水を氾濫させてか。それならすべての河をガイアの夫と呼ぶことになりはしないか、いずれも大地に氾濫するのであれば。さらに、河から人間が生まれたのなら、こんどは河が人間の親から生じなくてはいけない、生みの親を明かすのはその後に続く者たちなのだから。また、どうして河と大地との結婚と呼ぶのだろう。婚礼とは知覚を具えたものがすることだが、大地は知覚を持つものに生まれついてはない。さてそうなると、あるいはダプネを河のひとつに数えるか、さもなければラドンを人間と考えるほかにない。

だがそれはそれとして、ダプネはガイアとラドンから生まれたものと、詩人たちに同意しておこう。では、その誕生した子供は、いったい誰のもとで育てられたのか。たとえ出生について認めるにしても、その養育が可能だったはずがない。いったいどこで、その娘は暮らしたというのだろう。「それはもちろん、男親のもとで。」ならば、人間のうちの誰がいったい河のなかで暮らすというのか。その父親にしてみれば、流れでもって溺れさせているとも育てているとも知れなかったろう。「いや、大地の下方、母親のもとで娘は育ったのだ。」そうなると、その娘はひっそりと、誰の目にも留まらなかったことになる。ならばその美しさは隠されてしまって、それに惹かれることもなかったはず。

好きにするがよい、この点でも詩人たちに譲るとしよう。ではいったいどうして、神が恋をし、渇望ゆえにみずからの生まれを欺いたというのか。愛欲は何にもまして厄介な存在であり、神々について難儀の最たるものを認めるのは冒瀆にほかならない。仮にも神々があらゆる意味で病にかかるのなら、もはや死すべき人間とのあいだに何の違いがあるというのか。また、彼らがもし愛欲という難儀の極みをこうむっているなら、よりひどいことを患っておいてほかの病は遠ざけているなどということが、どうしてありえたろう。否、神の生まれは苦しみを知ることがないのであり、アポロンが恋をすることなどなかったのだ。

さらにいったい、少女を追いかけるアポロンは、神でありながらどうして人間よりも後れをとったのだろう。男が女より優位なのに、それで

いて女が神を制したのか。人間でもより分が悪いものが、神をも凌いだというのか。さらに何ゆえ、逃げる娘を母親は迎え入れたのだろう。結婚はつまらぬことだからか。それならなぜ、自分は母親になったのだろう。それともやはり立派なことなのか。ならばどうして、善いことから娘を引きとめたのか。さてそうなると、あるいは彼女は母親にはならなかったか、さもなければひどい母親だったと考えざるをえない。

さらに何ゆえ、ガイアはみずから矛盾するような行動をとったのだろう。娘を助けることでアポロンに苦痛を与えておきながら、ふたたび地上に戻してこんどはその心を魅了したというのなら。そして何ゆえ、かの神が三脚鼎のもとでその樹に誉れを授けたろうか。その枝は悦楽のしるしにこそなれ、かたや神託とは美徳のあかしにほかならない。それがどうして、もとより混同すべくもない事柄を、アポロンが一緒にしたというのだろう。そもそも何たることか、ことの発端は人間にありながら、神がそれに動じるような目に遭うとは。

もうやめにしよう、詩人たちのことはここまでとしておく。あるいは私が詩人に張りあって吠えていると思われてもいけないので。

6 確証

確証とは、ある提示された事柄をゆるぎなく固めることである。

確証の対象となるのは、あまりに自明だったり、もとより成立不能なものではなく、その中間に位置するような事柄だ。

確証を行うには、論駁の逆を用いることが必要となる。はじめにその主張を立てている者に対して称賛の言葉を述べ、ついで順序立てた説明をする。そして、論駁の反対となる諸項を押さえる。まず、不透明さに代えて明瞭さ、また、不可解さに代えて説得力、不可能性に代えて可能性、矛盾に代えて一貫性、不適切さに代えて適切さ、そして、無益さに代えて有益さ。

この課題は、弁論術の力を余すところなく含んでいる。

確証「ダプネにまつわる話が道理にかなっていること」

詩人に反論する者は、ほかならぬ詩の女神ムーサたちに反論しているとしか思えない。詩人の発する言葉がムーサたちの考えで立ち現れるのなら、詩人の仕事を悪しざまに言いたがる者は、どうしてムーサたちに盾突くことにならないだろう。事実、私はあらゆる詩人の考えを受け入れる者だが、わけてもダプネがアポロンの恋人だったという考察をした詩人については尚更のことだ。それというのも、次のように語る詩人を、なかには疑う向きもあるのだから。

ダプネは大地の女神ガイアと河神ラドンとから生まれたという。いったいどうして、神々にかけて、これが信じがたい話なのか。水と地とは、万物の成り立ちそのものではないか。生命の種子は、その元素から生じるのではなかったか。そこでもし、生成するものすべてが地と水とに由来するのなら、ダプネは万物に共通する出生をはっきり証明していることになる、ガイアとラドンとから生まれたのだから。さらにまた、万物の生じ来るところから生まれた娘であれば、容姿において他から傑出していたとしても何ら不思議はない。最初に大地から生み出されるものこそが、その本来的な美しさを具して現れるのだから。というのは、およそ生命には多くの変化が現れるけれど、美しさもまたそうした中に見出されるはずだ。また、いちばん初めに現れ出るものこそが、何より美しい盛りを示す。道理で、ダプネが見目かたち際立ってもいたわけだ、何よりまっ先に大地から生まれたのだから。

ダプネが抜群の器量だったので、アポロンがその娘に恋い焦がれるようになった。これもまた至極もっともなことだろう。というのは、およそこの大地に美しいものが存立するならば、それは必ずや神々に由来している。そこで、神々の贈り物であるその分だけ美が地上の善よりもなお喜ばしいとされているのなら、美は神アポロンをもまた夢中にさせたに違いない。神々から贈られるものは、誰もが等しく大切に思うのだから。

恋をしたアポロンはその感情を癒すことを選んだ。それはつまり、美徳はかくも抗いがたい力を具しており、そして苦労なくして美徳を手にすることはない、ということだ。それで、恋い焦がれて苦しみ、苦しんでついに手にすることがなかったのである。美徳の終わりを見ることは不可能なのだから。そうすると、アポロンが恋をしたと語る者たちは、大地とか神々の本質を辱めているのではなく、むしろ美徳の本質がその動因であることを明かしていることになる。求められる対象が、求める側のあり方を規定しているのだ。

その娘は逃れようとし、それを母親が迎え入れた。これは、人は誰しもそうした性質に生まれついている、つまり、そこから生まれ来ったところへと急ぐものだということ。それでダプネは、ガイアのもとへと赴いたのである。ガイアから生まれたのだから。

そして娘を受け入れたガイアは、代わりに植物をもたらした。いずれも大地の役割なのだ、そこへと人間が死んで行き、そしてそこから樹木が生えるというのは。

さらに、現れたその植物は、アポロンにとって名誉の謂われとなった。神々はみずからの配慮の外に植物を放っておくどころか、むしろ樹々に誉れを授けもするのである。大地のもたらす初物は、神々に献じられるのだから。そしてさらに、それが神託のしるしになった。これまた然るべき話だと私は思う。すなわち、その娘を人は「慎み」と呼んでおり、そして神託を告げることは、慎み深さから生まれるものだ。かくて娘が快楽を知らないその所以は、美徳に帰されることになる。これが身を持ち崩した者だったら、未来を見通すべくもないのだから。

以上のゆえに、私は詩人たちを称える。だからこそ、韻律を尊んでいるのだ。

7　汎用の論法

汎用の論法とは、目の前にある悪事を増幅して語る言葉である。

こう呼ばれるのは、その同じ事柄に手を染める者たちすべてにわたって当てはまることによる。つまり、裏切り者に対する言い方であれば、その行為を共有する者すべてに通用するということだ。

第二弁論および結びにふさわしい、ということから、汎用の論法は序を持たないのであるが、若い人たち向けの課題なので、前置きの型をこしらえておく。そのうえで押さえるべき項としては、まず反対の想定を置き、それから説明を加える。その際、それを説き明かすというやり方ではなく、というのもすでに分かっているはずなのだから、むしろ聴く者の感情を駆り立てるようにする。ついで比較を持ち込み、対比を通して被告の方により大きなことを帰す。それから意図と呼ばれる項があり、その行為に及んだ者の考えを非難する。さらには脱線を置き、過去の生き方についてそれを推量しながら悪く言い立てる。そのうえで憐れみの排除を行い、そしてこの予備課題のおしまいには、終極的諸項がくる。すなわち、合法性、正当性、有益性、可能性、評判、予想される帰結である。

独裁者に対する汎用の論法

およそ法律が制定され、法廷が我々のもとで運営されている以上、法律を無に帰そうとする者は法律によって罰を受けるべきだ。仮にもこの裁判を逃れて少しでも民主的になるというのなら、あるいは彼を裁きから放免することもあったろう。が、現下の問題を免れたらもっと凶暴になるに違いないのだから、被告を見逃してこれを独裁の始めとしてしまうことが、どうして正しいだろう。

実際、これがほかの場合であれば、裁定の任にあたる誰ひとり、被告の放免によって何らの損失を受け取ることもなかったろう。けれども独裁の容認は、まさしく裁判官たちを害することになる。なぜなら独裁者が権力を握れば、もはや裁判を行う余地は残されないのだから。

そこで思うに、もし先人たちの意向に考え及ぶなら、諸君は被告の意図するところをよりはっきり見て取ることになろう。我々によかれと専制

を斥ける政治体制を案出してくれた彼らは、なおかつじつに正しかった。人間には時ごとに様々な偶然が降りかかり、それが人々の考えに変化を及ぼしてしまう。そこで、廻り合わせの不均衡を法律の平等性によって正そうと、彼らは法律というものを見出し、それに基づいて万人における考えをひとつにした。偶然のもたらす弊害を是正するもの、これこそが、諸々の国家にとって法となったのだ。

こうした事情にいっさい配慮せず、彼は国政のしきたりを改変するというほとんど最悪の企てを思いついた。次のように、自問自答したことだろう。「このような事態を、神々よ、いったい何としよう。大衆と同列に見られ、ほかの連中と同じだけを所有するのに甘んじ、そして時の運が富に向かって野心を示すのを、黙って眺めていろというのか。もし多くの輩と同じだけで私が我慢し、そして貧乏人どもが寄り集まって裁きを行うなら、民衆の是とするものまでが私にとって法となったに違いない。そこで、これを避けるにはどうすればよいか。アクロポリスを占拠してやろう。それから、くたばるべき法律などというものはどけてしまって、そうして私が民にとって法となるのだ、民の方が私にとって、などということではなく。」こうしたことを、彼は自分に向けて語ったかもしれないが、しかしその実現を見ることはなかったろう。なぜなら神々の計らいが、それを妨げたに違いないから。どうか、我々が神さまがたに感謝を捧げるその所以であるはずの力が、今日のこの日にかの者までをも助けてしまうことのないように。

殺人者は恐ろしい。が、独裁者はそれよりさらに恐ろしい。前者はそれに行き当たった一人を殺めるのみだが、後者は国家の運命をそれごと転じてしまうのだ。ならば、限られた範囲で苦しみを与えることが全員に死をもたらすよりはなお軽微である分、殺人者は独裁者に比べればまだ軽いことになる。

ほかの人間なら例外なく、何かごく凶悪なことを行ったにせよ、少なくともその意図だけは行為から区別することになろう。けれどもひとり独裁者だけは、その気がなかったとは敢えて主張しないのだ。仮にもし

ぶしぶ専制行為に手を染めたというのなら、あるいは彼を裁きから放免することもあったろう。が、計画しておいて実行に移したのだから、行為より先に思考のうえで出来上がっていたことに目をつぶるのが、どうして正しいだろう。

実際のところ、ほかの人間が我々のもとで裁かれる場合、いずれも当の案件だけが吟味の対象とされるものの、過去の行いゆえに放免となることも多い。ところがひとりこの被告だけは、そのどちらの生き方についても裁かれることになる。過去にあっては節度ある行動をとらず、現在ではこれまで以上に手が付けられないのだから。そこで彼は、過去の時点と、そしてそれ以降に苦しめてきたこと、この両方についての罰を受けるべきなのだ。

いったい誰が、願い出てこの者を請け戻そうとするだろう。「それはもちろん、子供たちが。」それでも、彼らが嘆き訴えるそのときこそ、法律の存在を考えてもらいたい。そのために投票するほうが、彼の子供たちのためにそうするよりも、はるかに正しいことだろう。その子供たちのせいで、彼の独裁体制が固まってしまうのだ。かたや法律によって、裁判の運営を諸君が手にしていたはずだというのに。だからこそ、諸君が裁判官となっている所以のものに票を投じるほうが、より正当であるに違いないのである。

さらにまた、法が祖国の解放者を尊ぶよう求めているなら、隷属状態に陥れた者を懲らしめるのは必定だろう。

そこで彼は、諸君のもとで、自分がやった分に相当する罰を受けるのが当然なのだ。

また、独裁者が消えることはきっと有益なはず。それで法律が堅固なものとなるに違いないから。

さらに、この被告に懲罰を加えるのは、ごく簡単なことでもある。というのも、彼が独裁の樹立に護衛兵を求めたのと同様、独裁者を打倒するには我々にも味方が必要だ、などという話ではないのであって、ただ裁判官諸君の投票があれば、それで独裁権力をまるごと片付けるのに充分

なのだから。

8 称賛

称賛とは、目の前にある立派なことを説き明かす言葉である。

このように（エンコーミオンと）呼ばれるのは、その昔の「コーメーにおいて歌う」に由来する。隘路のことを人はコーメーと呼んでいたのである。

讃歌および賛辞との違いは、讃歌は神々に関係するが称賛は人間に属し、また、賛辞は手短になされるが称賛は弁論の技術に則して行われる点にある。

称賛の対象となるのは、人物や出来事、時候や場所、言葉を持たぬ動物、さらには植物である。まず人物とは、たとえばトゥキュディデスあるいはデモステネス、事物とは、たとえば正義あるいは節制、時候とは、たとえば春や夏、場所とは、たとえば港とか庭園、言葉を持たぬ動物とは、たとえば馬や牛、植物とは、たとえばオリーブあるいは葡萄の木。称賛のやり方には、一般的なものと個々に向けたものとがある。一般的とは、たとえばアテナイ人全体に対するもの、個別とは、たとえばアテナイ人のうちの誰か一人に対するものをいう。

さて、ここまでが称賛の類別だが、それを実作するには以下の諸項をもってする。まず、所与の論題に対して前置きを述べる。そのうえで出自を置き、それを民族、祖国、祖先および父祖たちに分ける。ついで養育に関して、それを活動、技術、法律に分けて言及する。そして、称賛におけるもっとも重要な項、すなわち営為を持ってきて、それを精神、肉体および幸運に分けることになる。精神とは、たとえば勇敢さあるいは思慮深さ、肉体とは、たとえば美しさとか敏捷さあるいは強さ、幸運とは、たとえば権勢や富さらには味方である。それらに加え、比較を持ち込み、対比を通して称賛される者の方により大きなことを帰す。そして、できるだけふさわしい結びを述べることになる。

トゥキュディデスの称賛

役立つものを案出した者たちを、彼らが見事に道をつけたそれをもって尊び、そこで日の目をみたことを創始者に正しく帰すのがよい。というわけで、トゥキュディデスを讃えてみたい、彼の言葉で彼を顕彰する、というのを目論みながら。実際、創案者は誰であれ尊重されるのが正しいけれど、わけてもトゥキュディデスについては、この上なく素晴らしいものを案出した分だけ誰より尚更のことだ。存在のうちでも言葉より優れたものは思いつかないし、トゥキュディデスより言葉を知る者は見つからないのだから。

さて、トゥキュディデスが出た土地は、彼に生命と、そして技芸とを授けた。ほかでもない、言論の誕生したまさにその場所から、彼は生まれたのだ。アテナイに生みの母を見出した彼は、一方では王族をその祖先とした。時の運よりも強力なものが、父祖の血脈から彼へと引き継がれたのである。名門の権勢と民主的な政体、これらを二つながら手にした彼は、それぞれの長所をもってもう一方を補った。不正な蓄財には市民的原則のもとで歯止めをかけ、政治資金については一族の富をもって埋め合わせたのだ。

こうした出自をもつ彼は、民主的政体および法律という何より優れたもののもとで養育される。そして、文武の両道に生きることを決意し、智の道を修め、なおかつ軍の指揮官になろうとの思いを固めた。言論と軍事とを切り離すことはせず、また戦争を思弁の一部にすることもない、というのである。もとは別々だったものをひとつに統合しようと、彼は単一の技術が存在しない事柄について、ひとつの修練を重ねるのだった。

成年に達する頃には、彼はそれまで充分に研鑽を積んできた事柄について、それを世に示してみせる機会をうかがっていた。そしてほどなく時の運が戦争をもたらすと、全ギリシア世界によって為された出来事をもって独自の学芸を作り出し、戦争が引き起こす事態の見張り役となっ

た。時がそれぞれの行動を覆い隠してしまうのを、彼はよしとしなかったのだ。そのおかげで、あるいはプラタイアの占領が知られることになり、またアッティカ領の蹂躙やアテナイ人によるペロポネソス半島海域の制圧が明らかにされた。ナウパクトスで起きた海戦、それをトゥキュディデスは書き留め、忘却を許さなかった。レスボス島の陥落は今日なお知られている。アンブラキアに対する戦闘、そこでの出来事を時が消し去ることはなかった。ラケダイモン人による不当な裁判は周知のものとなり、スパクテリアそしてピュロス、これらアテナイ人による大戦果も忘れ去られずにあった。さらにそこから知られるとおり、ケルキュラ人はアテナイ民会において発言し、一方のコリント人は彼らに反論を加える。また、アイギナ人は苦情を訴えるべくスパルタへと赴く。そして、民会において慎重論を唱えたのはアルキダモス、他方ステネライダスは開戦を促す。さらに、ペリクレスはスパルタ使節団を侮蔑し、また疫病に見舞われたアテナイ人たちがいきり立つのにも動じなかった。これらのすべては、まさしくトゥキュディデスの著述ゆえに、万世にわたって見守られることになったのだ。

さてそこで、いったい誰が彼をヘロドトスと比べてみるだろう。だいたい、あちらが娯楽のために筆を進めているのに対し、彼のほうはひとえに真実を目指して記述している。とすれば、楽しませるためのものが真実を求めるものに劣っているその分だけ、ヘロドトスはトゥキュディデスの見事さにはかなわないのである。

ほかにも多くのことを、トゥキュディデスについて語ることができたろう。賛辞の多さが、すべてを語ることを遠ざけなかったらの話だけれど。

知恵の称賛

知恵を得ることは幸せだ。けれども、それに見合うように讃えるのは不可能だ。そこにはたいへんな恵みが具わっており、神々に共通の所有物となっているほどなのだから。

なるほど、神々はそれぞれ、何らか個別の関心事を持っている。ヘラは結婚を、アレスはアテナと共に戦争を司り、かたや火でもって鍛冶仕事をこなすのはヘパイストス、ポセイドンは船乗りたちを導く。それぞれの神は、それぞれ個別の事柄に習熟している。けれども、知恵については誰もがそれに与っており、なおかつ皆にまさってそれを本分とするのがゼウスなのだ。神々のうちでもより大きな権能を持つ分だけ誰より才知に長けているわけで、つまりは知恵が、ゼウスにその権力を保証しているのである。神々はそれを生まれながらに持ち合わせていたけれど、その持ち物は、今度は地上へとやって来た。そして、神々の子孫がそれを人間生活の中にもたらした。そこで、私としては詩人たちをも称えないわけにはいかない。それというのも、パラメデスやネストル、そのほか有力どころでも一番の知恵者と詩に歌われる人物を、彼らは神々の子孫として創作したのであって、神々に生まれついた者とはしなかったのだ。なるほど、こうした者たち自身が神々だったのなら、やはり生まれの共通性をもってその美質が同じであることを明かしたに違いない。けれども、彼らは神々の美質を獲得したというそのことゆえに、神々の子孫として尊重されていたのであり、またそもそも知恵が一族の持ち物としてそこから生じ来ったはずの、神々の忘れ形見とも考えられているのだ。

さて、知恵というものは、相反するいずれの機会についても力を発揮する。すなわち、あるものは平和な時にだけ持ち上げられ、またあるものは戦時下にのみ称えられるけれど、ひとり知恵だけは、それぞれの状況を等しく制することができるのだ。戦時にあっては平和のことなどまるで関知しないかのように国を動かし、かと思えば、こんどは戦いに全く無知であるかの如く平和を維持するのである。そしてそれは、力を示していれば、その状況にのみ帰属するものと思われている。平和な時には法律を制定し、さらには平穏無事のあらゆる姿を示してみせるのに、かたや戦争となれば勝利を導くのだから。しかも知恵は、武力による制圧を承認しておきながら、議会にあっては他の伸張を許さない。人々が戦うとき、そして議論するとき、そのいずれに臨んでも等しく力を及ぼす

ことができるのである。

また、ひとり知恵のみが、神々の役割を演ずる。それだけが、神のように未来を知っているのだ。それは農夫を大地へと向かわせ、船乗りを海へと駆り立てる。知恵がなくては収穫を得ることもできないし、また船を再び陸につけるのも、賢明な舵取りなくして不可能だ。そうすると、海に何らか誇れる点があるならそのすべては、そしてまた、およそ大地が人間にもたらす産物もまた、知恵の発見にかかることになる。さらにそれは、天空がその内に秘めていたことさえ放ってはおかなかった。太陽がいかなる円を描いて周回するのかを、そして星のそれぞれが巡る道を、ただ知恵だけが人間のために発見したのである。さらにまた、大地の下のことまでも知恵はよく心得ているし、そして我々が命を終えた後のことを運ぶのも、ひとり知恵のみである。トロイアを、それは陥落させた。多くの歳月をもってしてもそこを落とすことはできなかったのに、智にすぐれた策略がそれを導いたのだ。また、たったひとつの方策によって力を得たそれは、ペルシアの軍勢をことごとく蹴散らしもした。キュクロプスがその目を失ったのは、オデュッセウスのほうが知略に長けていたからである。そうしてみると、何かが物事を制する時には、そのすべてが知恵から生まれたことになる。

さてそこで、いったい誰がそれを武勇と比べてみるだろう。だいいち、体力の為すべき業も知恵による配慮があればこそ、武勇から思慮を奪い去ったなら、そこに残るのは非難されるべきものであるに違いない。

ほかにも多くのことを、知恵について語ることができたはずだ。が、すべてを隈なく語り尽くすとなれば、それは途方もないことである。

9　中傷

中傷とは、目の前にある悪事を説き明かす言葉である。

汎用の論法との違いは、論法が懲罰を仕向けるのに対して、中傷はただ非難そのものに終始する点にある。

その区分けは、称賛と同じ諸項をもってなされる。また、中傷の対象とすべきは、称賛する場合と同じだけのもの、すなわち、人物や出来事、時候や場所、言葉を持たぬ動物、さらには植物である。中傷のやり方には、一般的なものと個々に向けたものとがある。

前置きを述べたうえで、まず出自を持ってきて、それを称賛と同様に分ける。そして、養育、行為、比較、さらには結びを、やはり称賛の場合と同じように配置していくことになる。

ピリッポスの中傷

美徳を讃えないのも、悪事を非難しないのも、好ましいことではない。なぜなら善行が称賛され、あるいは不正が難じられることのそれぞれによる利益が、見過ごされてしまうから。実際、行状の悪い者はなべて悪評をこうむるのが当然だろうけれど、わけてもピリッポスについては、あらゆる悪人を凌駕している分だけ誰より尚更のことだ。

すなわち、まず彼が出たのは蛮族のうちでもごく賤しい部族であり、その柔弱さゆえに場所から場所を転々とせずにはいなかった。はじめにアルゴス人たちが外へ追いやってしまうと、彼らはさまよったあげく現在の土地へと落ち延びたのだが、定住するにあたって二つの不都合にぶつかることになる。より強い者には屈するけれど、劣った相手なら駆逐するという、この柔弱さと欲深さゆえに、しっかり領土を固めることを許されなかったのである。そういう部族に生まれた彼は、それに輪をかけてお粗末な町の出だった。マケドニアが蛮族きっての賤民なら、ペラはそのマケドニアでもことのほか柄が悪く、そこから奴隷を連れてくるのを人は決して喜ばないのだ。そんな土地から生まれておきながら、彼の先祖というのがまた、それに劣らず手が付けられない。彼の祖父にあたるピリッポスはその出自のせいで領地の支配を認められなかった。それから父であるアミュンタスにしても、王位に就くため外国の勢力を必要としている。追放された彼を、アテナイ人たちが復帰させたのだ。

こうした出自をもつ彼は、人質としてテーバイに留まることになった。そしてギリシアのど真ん中に暮らしておきながら、人々と交わってその習慣を改めるでもなく、かえって蛮族式の放埒さをギリシア的習俗の中に持ち込んでいた。しかもギリシア人と蛮族とでは何にせよ隔たりがあるというのに、そのどちらに接しても彼はついに彼のままだった。似るところない民族のあいだで、等しく悪事を働いたのである。

彼はまず、同族を奴隷の境遇に陥れ、自分がその中に生まれたはずの人々に対して背信行為をしてみせる。それを手始めに、国境を接する相手に攻撃を仕掛けては滅ぼしていった。パイオニア人を落とすとイリュリアを服従させ、さらにはトリバッロイの領地に攻め入ってそこを取り上げた。たまたま位置した場所がまずかっただけの諸部族を、彼はことごとく手中に収めようとしたのである。が、戦争によって蛮族たちの身体は奪ったけれど、からだと一緒にその思考までをも取り上げることはできなかった。否、かえって武力で奴隷にされた者たちは、反旗をひるがえすことを夢見ていたのだ。実力行使による隷属状態も、思考の上では自治を保つことができたわけである。蛮族のうち境を接する者たちを従属させた彼は、こんどはギリシア人の方へと進路をとっていく。そして、まずはトラキア地方のギリシア人都市を陥落させた。アンピポリスを奪取し、ピュドナを制圧し、それに加えてポテイダイアをも従える。もはやパガソイの外にペライがあり、ペライの外にマグネシアがある、という状況ではなかった。否、テッサリアの都市はことごとく征服され、そして彼らは隷属状態をまるで部族のしるしであるかの如く背負う羽目になったのだ。そこで、こんどは彼の最期についても語っておくのがよいだろう。攻め滅ぼした相手は数知れず、みずからと協定を交わした人々まで裏切って隷属させたものだから、そうした背信行為に憤った神々が、彼にふさわしい最期を用意した。戦場での死を与えたのでも、あるいは貴人にその最期を看取らせたのでもなく、まさに快楽それ自体によって破滅させたのだ。生きているうちも死んでからも、どちらにあってもその放埒さの証人を連れていくようにと、快楽をしてピリッポスの悪事を

よろしく葬らせたわけである。

さてそこで、いったい誰が彼をエケトスと比べてみるだろう。だいたい、あちらは人のからだの端々を奪っても残りはそのままにしておいたのに、彼の方は人々のからだ全部をそれごと駄目にした。ならば、全体を破壊することが部分的にそうするよりもなお残酷なだけ、ピリッポスはエケトスよりもさらに恐るべき人物なのである。

ピリッポスにはのさばるのをやめる心得などなかったけれど、彼について論じ尽くすのはやめにすべきだろう。

10 比較

比較とは、対置を通して当の比べられているものにより大きなことを帰すような、対照し吟味する言葉である。

比較を行うには、美しいものを有益なものに対置し、あるいは瑣末なものを瑣末なものに、あるいは有益なものを厄介なものに、あるいは小さいものをより大きなものに対置することが必要だ。また、比較は総じて、称賛と中傷とを組み合わせた、複合的な称賛もしくは中傷となる。比較の論法はどれも絶対的に威力を持つけれど、とりわけ小さなものをより大きなものと比べる場合がそうである。

比較の対象とすべきは、称賛および中傷の場合と同じだけのもの、すなわち、人物や出来事、時候や場所、言葉を持たぬ動物、さらには植物である。

また、比較を行うには、全体と全体とを対比するのでなく、というのもそれでは間延びして論争に適さないので、むしろ項と項とを突き合わせることになる。それで初めて論争向きになるのだ。なぜなら、全体を区分けするのは称賛のやり方ではあるけれど、比較のそれではないから。なお、そこに比較という項はない。この予備課題の全体が比較なのだから。

アキレウスとヘクトルの比較

美徳と美徳を比較することを目論んで、ペレウスの息子をヘクトルと対照して吟味したい。諸々の美徳はそれ自体で尊いけれど、比べられた場合にはいっそう羨むべきものとなるので。

さて、この両者は、一処ではないものの、等しく誉れ高い土地に生い立った。かたやプティアは、ヘラスという呼称の生まれた地であり、一方のトロイアも、神々でも有力どころがその建国者となったのだ。そこで、同じような土地から生まれたことが称賛に資する限りにおいて、ヘクトルはアキレウスに引けを取らないことになる。さらに、どちらも名高い土地に生まれながら、両者とも同じような親族を持っていた。それぞれゼウスの血を引いていたのだ。アキレウスはペレウスの子、ペレウスはアイアコスの、そしてアイアコスはゼウスの子。同様に、ヘクトルはプリアモスとラオメドンの子だが、ラオメドンはダルダノスから生まれ、ダルダノスはゼウスの子として生まれたのである。ゼウスを祖として生を受けた彼らは、やはり同じような父祖を持っていた。かたやアキレウスにはアイアコスとペレウス。前者はギリシア世界を干ばつから救い、また後者はラピテス族を滅ぼし、その勇敢さの褒美として女神と夫婦になることを引き当てた。かたやヘクトルの方には、祖父として、もとは神々と共に暮らしていたダルダノス、また父として、神々によって築城された都の主プリアモスがいる。そこで、神々と夫婦になることと、寝食を神々と共にすることが近しい限りにおいて、ヘクトルはアキレウスにきわめて近いということになる。

このような父祖から生まれた両者は、どちらも武勇に向けて養育された。前者はケイロンによって育てられ、対して後者についてはプリアモスがその養い手となって、持って生まれたものに美徳の教えを加味したのだった。したがって、どちらも等しく美徳に向けて養育されたことは、彼らに同等の名声をもたらすことになる。

成年に達すると、両者はひとつの戦争において同様の力を発揮する。かたやヘクトルは、まずトロイア人らを統率し、そして駆け巡ってトロイアの盾となった。それから、神々の加勢を得て戦いぬき、そして斃れたことで、トロイアの陥落を招いた。かたやアキレウスはといえば、陣営にあってギリシア勢を率い、トロイア中を恐怖せしめて圧倒し、また女神アテナを味方とし、そして斃れたことで、アカイア勢の優位を遠ざけた。そして、一方はアテナによって打負かされて命を落とし、もう一方はアポロンから射掛けられて斃れた。いずれも神々のもとから生を受けておきながら、神々の手で命を奪われたのだ。すなわち彼らは、生を受けた由来のものを、命の終わりとしても受け取ったことになる。じつに、それぞれの生と死とがごく近しい限りにおいて、ヘクトルはアキレウスとほとんど同等なのである。

ほかにも多くのことを、それぞれの美徳について語ることができたろう。両者が、その活躍の世評をも近しくしたのでなかったらの話だけれど。

11 性格づけ

性格づけとは、ある特定された人物の性格を模倣することである。

そこには、夢幻創作、人格創作、そして性格づけという、三つの別がある。まず性格づけは、人物は周知のものとし、ただその性格をこしらえるものであり、それで性格づけと呼ばれる。たとえば「エウリュステウスが命令を下したとき、ヘラクレスはどんな言葉を発するだろうか」。ここでは、ヘラクレスは知られているけれど、語るときの性格は我々が想像することになる。また夢幻創作とは、周知の人物でも、すでに死んでしまって語るのをやめている場合。エウポリスが『デーモイ』において、またアリステイデスが『四人のために』において創っているようなものがそれに当たる。それで夢幻創作と呼ばれる。また、人格創作とは、性格も人物も全部が創られる場合であり、たとえばメナンドロスが「反駁」

を創作したような仕方である。というのも反駁とは、行為ではあっても、もはや人物ではありえない。そこで人格創作と呼ばれる。性格とともに、人物まで創られるのである。

さて、以上が類別だが、さらに性格づけには、感情的なもの、性格的なもの、そしてその混合がある。感情的とは、感情の表白に終始するもので、たとえば「トロイアが落ちたとき、ヘカベはどんな言葉を発するだろうか」。性格的とは、ただ性格だけを持ち込むもの、たとえば「陸の人間が初めて海を目にしたとき、どんな言葉を発するだろうか」。混合とは、性格と感情とを二つながら扱うもので、たとえば「斃れたパトロクロスのために戦うことを決意したアキレウスは、どんな言葉を発するだろうか」。この場合、その決心が性格に、友人の死が感情にそれぞれ対応する。

性格づけを実作するには、その文体を、明快、簡潔、華があって、のびやかなものとし、綾だとか型などは一切遠ざける。そしてその区分けは、諸々の項に代えて、三つの時、すなわち現在、過去、未来をもってする。

性格づけの演習「子供たちが死んだとき、ニオベはどんな言葉を発するだろうか」

どんな境遇から、どんなそれへと転じていることだろう。子供のないわたし、それまでは、子宝に恵まれたと評判だったのに。ありあまっていたものは、欠如へと転じてしまった。たったひとりの子の母でさえもない。以前には、子だくさんの親だと思われていたのに。はじめから産むのでなかった、産んで涙を見るくらいなら。親とならない者たちよりも、奪い取られるほうがずっと不幸。この手にしたものが取り上げられるのは、つらいことだから。

しかし、ああ何と、わたしは自分の親とほとんど同じめぐりあわせにあるのだ。タンタロスから、わたしは生まれた。神々とともに暮らしていた彼は、そうしたつき合いのあとで、神々のもとから追い落とされた。そしてタンタロスから出たわたしは、不幸でもって生まれを証明してい

ることになる。レトと近しくなって、女神のせいでひどい目を見ているのだから。あの交際が子供たちの収奪を招き、神さまとのつき合いが、最後にはわざわいとなった。そうなる以前、わたしはレトよりずっとうらやむべき母親だった。けれど見知った仲となって、子供をなくした、そうなる前にはたくさんいたというのに。そしていま、男の子と女の子、両方からなる子供たちの横たわるのを前に、嘆くにしても、より厳かにするはずのほうは、よりやるせない。

どこへ向かおうか。何にすがったらいいのか。どんなお墓が、子供たちみんなの破滅につり合うだろう。わざわいを前にしては、つぐないもそれに追いつくことがない。でも、どうしてそれを悲しむことがあろう。ほかのものに生まれを変えてもらえるよう、神々に頼むことだってできるのだ。この不幸のたったひとつの解決を、わたしは知った。なんにも知覚をもたないものに変わってしまうこと。それでもいっそう不安になる。その姿になってもなお、泣くのをやめないかもしれない、と。

12 描写

描写とは、明らかにされるべき対象を目にありありと浮かべさせる、説明的な言葉である。

描写の対象となるのは、人物や出来事、時候や場所、言葉を持たぬ動物、さらには植物である。まず人物とは、たとえばホメロスの「両の肩は丸まって、肌は黒く、縮れ毛で」がそれにあたる。出来事とは、たとえば海戦とか陸戦、それらを歴史家のように扱う。時候とは、たとえば春や夏、その時期にどれだけの花が生じるか。場所とは、やはりトゥキュディデスがテスプロティス地方のケイメリオン港について、それがどういう形状かを語ったような具合である。描写を行うには、まず人物の場合だが、第一のものから始めておしまいのものへと語っていくことが必要となる、つまり、あたまから足へである。出来事の場合には、それ以前のことから始めて、その時の状況、さらに、そこから得てしてどういう

ことが帰結するかを、そして時候や場所についてなら、その周辺のこと、および、それそのものに具わることをもとに語る。

描写には、単純型と複合型がある。まず単純型とは、たとえば陸戦あるいは海戦などを語りとおす。対して複合型は、たとえば出来事であれば、それと同時に時候にも結びつける、ちょうどトゥキュディデスがシケリア島での夜戦を描写しているような仕方で。戦闘とあわせて、どのように事が運んだのか、そして夜間いかなる状況にあったのかが明記されているのである。

描写を行うには、緩やかな文体を用い、また種々の表現で彩りを添え、総じて描写される事物に擬することになる。

アレクサンドリアの神殿およびアクロポリスの描写

アクロポリスとはすなわち、都市における公共の安全性に寄与すべきものである。都市（ポリス）の頂（アクラ）なのだから。そしてそれら自体、家屋によって防御されるというよりも、むしろ都市を守る城壁となるはずだ。アテナイ人たちの場合、そのアクロポリスとなっているのはアテナイ市域の中央だけれど、一方でアレクサンドロスは、みずからの都でも頂の部分をそう呼ぶ所以のものとしている。すなわち都市のてっぺんに建設したのであり、それをアクロポリスと呼ぶのがずっと由緒正しいことになる、アテナイの人たちがそれで得意になっていたほうよりも。その様子は、およそ以下に言葉を尽くすとおりである。

何であれ頂とは、地面から突出し、はるか高みにまで至るようなものだが、アクロポリスと呼ばれるのには二通りの理由がある。てっぺんまでそびえ立っていること、そして、都市の頂上部に位置していること。それからまた、そこに至る道は一様ではない。あるものは道だけれど、あるものは入場路となる。これらの道が呼び名を違えているのは、その形状に応じる。前者は徒歩で赴いたり、また荷車で入ることもできる共用の道だが、後者には階段が設けられていて、車でそこに進入することは

できないのだ。階段に次ぐ階段がどこまでも、低いところから始まって天空へと導かんばかりに続き、百を数えてもまだ終わらずに、数の終わりをもってようやく正しく数え上げたことになる。その階段を、こんどは門が待ち受けており、手頃な大きさの格子戸で両側から閉めるようになっている。そして屹立する四本の巨大な円柱が、諸々の道をひとつの入口へと導く。その柱のすぐ上部は構築物になっていて、中くらいの柱をいくつも配している。それらは色もとりどりに、意匠をちりばめられて美しく立ち並ぶ。さらにその建物の屋根は円形で、その側面を取り巻くようにして偉大な事績の記念物が据えられている。

アクロポリスそのものに進んでいくと、そこにはひとつの空間があり、四方から等しく仕切られて、ちょうど長方形のかたちをしている。また、中央には列柱に囲まれた中庭がある。中庭に接して柱廊が続いており、その柱廊は一様の柱で仕切られているのだが、その数はこれ以上多いということがあり得ないほど。それぞれの柱廊は別のそれと交差して終わり、ひとつの柱が両方の柱廊に対して二役の仕切りとなって、そこで一方は終わるけれど、今度はもう一方が始まっている。柱廊の内側にはそれに沿うように空間がしつらえられ、このうち書物を収納するようにできている一角は学究の徒が智を探求するよう開かれて、都市全体が知識を自由にできるよう促している。また、古来の神々を礼拝する場が設けられてもいる。柱廊の屋根には黄金が施されており、また柱頭は青銅で細工されて、やはり金で覆われている。なんといっても、中庭の装飾が一通りでない。それぞれ違った趣があって、なかにはペルセウスの競技を主題とするものなどがあった。そして、中央にそびえ立つひとつの円柱。その高さはずば抜けていて、これが居場所を教えてくれることになる。歩くといっても、どこへ進んでいるやら判らないのだ、この柱を道しるべとしないかぎりは。さらには大地や、また海に向かって、アクロポリスを際立たせてもいる。およそ物事の始まりは、この円柱のてっぺんにかかっていたのである。また、その庭の中程までも行かない手前に建物があり、扉ごとに区切りがあって、いにしえの神々の名がありったけ、そ

れぞれにあしらわれている。ほかにも二柱のオベリスクや、かのペイシストラトス一族のよりさらに上出来の泉もあるのだけれど、驚きなのは、創作者の数が信じがたいこと。作品を創るにあたって一人では不充分と、アクロポリス全体でその作家は十二人を数えたというのだから。

アクロポリスから降りていくと、その片側にはスタジアムのような平らな場所があり、現にその名で呼ばれている。また片側にはやはり同じような区画があるけれど、大きさはそれほどでない。

まったくもって、この美しさは語るに余りある。もし何か見落としがあったとしても、それは驚きのうちにそうなったのだ。言葉にならないからこそ、触れずにおいたのである。

13　一般論題

一般論題とは、ある考察されるべき事柄についての、論理的な検討である。

一般論題には、市民的なものと観照的なものがある。市民的とは、市民生活に関わる行為を扱う。たとえば、結婚すべきか、航海すべきか、城壁を築くべきか。これらの事柄はどれも、市民生活に関わりを持つ。他方、観照的とは、単に思考の上で考察されるもの。たとえば、天は球体であるか、宇宙は複数存在するか。これらは人間によって経験されるには至らず、ただ頭の中だけで考察されるのである。

一般論題と個別案件との違いは、個別案件は状況を伴うが一般論題は状況を持たない点にある。状況とは、人物、出来事、原因その他をいう。たとえば「城壁を築くべきか」は一般論題であり、その検討に人物は含まれない。これに対して「ペルシア人の襲来に際してラケダイモン人たちがスパルタに城壁を築くことを討議する」は個別案件となる。思案するラケダイモン人たちが人物、スパルタに城壁を築くことが出来事、そしてペルシア人の襲来が原因となるのだから。

予備課題において、一般論題はまず反対の立論およびその解決を、主

題に応じて持つことになる。

そこで一般論題の区分けとしては、はじめに導入と呼ばれるものを、前置きの代わりに述べる。ついで押さえるべきは、終極的諸項、すなわち、合法性、正当性、有益性、可能性である。

一般論題「結婚すべきか」

手短に万事を誉めようと望む者は、結婚を讃えるがよい。はじめ、それは天から生じて、かえって天を神々で満たし、父という名の由来である者たちの父となった。そして神々を導いて、彼らがその生まれを保つようにした。それから地上へとやって来て、残りの者たちすべての出生をもたらし、留まりようのないものが子孫をとおして同じであり続ける工夫をしたのである。そして人間たちを、まずは武勇へと駆り立てる。妻子を得させるのは結婚であり、彼らのために戦争は行われるので、この贈り物によって力を強くせしめたわけである。ついで、勇敢であると同時に正義にかなうようにもさせる。子孫は名誉を求め、彼らをおそれて人間は正しい行いをする、そうやって結婚は、人々を勇敢かつ正当であるよう仕立てる。さらには、いちばん大切な者たちに心を配るよう促すことで、賢くもするのである。しかも驚くべきことに、結婚は自制心をもたらすことさえわきまえていて、快楽が幅を利かせるうちにも節制が加味されることになる。快楽に法を据えることで、自制心は法の下に快楽を置くのであり、そうやって、それ自体では咎められるべきものが、結婚を伴うことで称えられるのだ。さてそこで、もし結婚が神々やそれに続く世代のそれぞれを導き、また人々を勇敢であると同時に正しいものに仕上げ、賢くかつは自制が利くようにも整えたのなら、結婚とは、能う限りの賛辞を送られるべきものでなくて何だろう。

「たしかに。だが、それでも結婚は禍いのもとだ。」

思うにそれは、結婚をではなく、廻り合わせを非難しているのだ。なぜなら人間が災厄としてこうむることは、結婚ではなく、偶運がもたら

すのである。一方で結婚が人間に対して誇るものは、もはや偶運がよこす利得ではありえない。だから結婚を、むしろそこに具わる恵みのゆえに称えるべきなのだ、廻り合わせが持ち込む懸念のせいで非難するよりは。仮に人間生活のうちで最低のものを結婚に帰したとして、だからといって結婚を遠ざけるべきなのか。いや、行動につきまとう困難が、その行動を回避させることまではしないはず。何なら、あなたがきっと非難するような要素が付いてまわる営みを、いちいち確かめてみるがよい。農夫たちを雷雨は苦しめ、雹が襲おうものなら破滅を来す。雷雨が農夫たちの土地を駄目にするからといって、彼らはけっして土地を見捨てたりはせず、それでも耕し続ける、たとえ天候に苦しめられようとも。それから、海に出る者たちにも不運はあって、嵐が襲えば船は駄目になる。被害に遭う番がまわってきたからといって、彼らは船に乗るのをけっしてやめたりはせず、むしろ災難のほうは廻り合わせのせいにして、海から生じるあがりを待つのである。それからまた、戦争は戦う者たちの身体を駄目にするが、人は戦って死ぬからといって戦争をやめることはなく、かえって戦いに参加すれば称賛されるのだと、死ぬことを厭わず、そこにある不運をそれと共にある利点でもって覆い隠すのだ。まずいことのせいで同じだけの善が避けられてはならず、むしろ立派なことのためには最悪なものにも耐えるべきなのである。まったくもって、農夫や船乗り、さらには戦場に赴く者たちは、当面する困難をそこに併存する美点のために耐え忍ぶ。それでいて、結婚には苦痛が付きものだから我々は結婚を軽蔑すべきだ、などという話が、どうして成り立つだろう。

「たしかに。だが、妻をやもめに、子供を孤児にすることになる。」

そうした死への懸念、そして苦しみは、自然の理が知るところのもの。思うにあなたは、人間を神にしなかったといって結婚を責め、死すべきものを神々に列せしめなかったといって結婚を咎めているのだ。いったいどうして、死の仕業について結婚を責めるのか。またどうして、自然の知るところを婚礼の話に持ち込むのか。死すべく生まれたものは死ぬ、それを受け入れるがよい。人間に生まれたせいで死を迎え、死んで伴侶

をやもめにし、また子供を孤児にさせるとして、ひとり自然のもたらすこの事実を、どうして結婚の仕業だと言いたがるのか。逆に私は、結婚が孤児や寡婦の境涯を改めると考える。父親が死んで妻には子が残される。が、孤児たちにもう一人の父をもたらすのが結婚であり、苦しみは、結婚から生じるのでなく、結婚によって覆い隠される。結婚は、孤児の要因ではなく、その取り消し役になるのである。それから、死をもってやもめ暮らしを来すのが自然の理なら、婚礼でそれを転じるのが結婚である。死別がやもめの憂き目にあわせた女性を、夫と共に暮らすよう整えるのが結婚なのだ、まるで自分の恵みを監督するかのように。始めに呼び寄せたものが奪い去られたなら、それをもう一度もとに戻すのである。だから結婚は、やもめ暮らしを解消しても、その招来を事とするものではない。さらには死別によって子を奪われた父も、結婚によってほかの子を授かるならば、改めて父親になるのだ、一度はそれが許されなかったとしても。さて、どうだろう。こうした結婚の美点を、あなたは結婚の罪にすり替えようというわけだが、私からすればそれは、婚礼を貶めるというよりむしろ、讃えるのを望んでいるとしか思えないのだ。婚礼の恵みを数え上げるよう仕向けて、つまるところは結婚の告発者ならぬ賛美者となっている。おまけに、結婚に非難を向けながらもこちらが称揚するのを必然とし、また結婚の難点をもってその恩恵一覧としてくれるのだから。

「たしかに。だが、やはり結婚には苦労が多い。」

ではいったい、苦しみを解決してくれるのは、結婚でなくて何だろう。重荷となるものはことごとく、結婚によって解消し、そしてまた、妻とともに語らうことは心の安らぎそのものだ。夫が妻と一緒に寝床へと赴くのは、どれほど素晴らしいことか。そしてなんと穏やかな心持ちで、子供に期待がかけられることだろう。待ち望まれて誕生し、姿を見せて父に話しかけ、やがて技芸に励むようになり、そして父親と一緒に働き、民会で発言し、さらには老いた父の世話をし、ひとえに、求められる限りの存在となるのだから。結婚がもたらしうるものは、言葉で語り尽くす

べくもない。結婚は偉大である。神々を導き、そして同一性を留める工夫で死すべき存在を神の如くに思わせる。さらにはそれに与る者たちに、正しいはずのことを教え、分別を弁えるよう仕向け、あからさまに害をなすのでない快楽を追究するのである。だからこそ、およそ結婚は、何より尊重されるべきものとなっているのだ。

14　法案

法案についても、これを課題のひとつとする場合がある。ほとんど純然たる個別案件に等しいのだけれど、かといって個別案件としてのすべてを満たしてはいない。そこには人物が持ち込まれるものの、その全体がつまびらかにされてはいないのだ。ゆえに個別案件に属するというよりも、むしろ一般論題のうちに含まれることになる。総じてある型の人物を容れる点では一般論題を超えていても、はっきりした状況を伴わないために、個別案件には満たないのである。さて法案は、策定された法律の弁護および非難という二通りの課題となる。法律とは「神々の発明にして贈り物、かつは市民共通の約束事、そして神と人、双方に対する過ちを正すもの」。

以上が法案の類別だが、それを実作するには、政策の検討と同じ諸項をもってする。すなわち、合法性、正当性、有益性、可能性である。前置きを述べ、序についでいわゆる反論を置く。それから、いま挙げた諸項を押さえる。ゆえにこの点でも、一般論題とは相違することになる。

姦通現行犯はその場で殺されるべしとする法律の非難

この法律をそれごと是認するつもりはない。全面的に法案の非を鳴らそうというのでもない。姦通行為を斥けている限りでは規定に賛成だが、裁判官の票決を待たないという点で、その選択を難じるのである。実のところ、もし裁定者たちの収賄を断じるといって法廷を無にするなら、そ

れは裁判官を軽んずる考え方だと非難されよう。また、現に諸君が正しく裁定している如く、もし正しい裁きを彼らが行うものと考えるなら、一方で裁判官たちを認めておいて法律を裁定者から切り離すのが、どうして正当なことだろう。実際、既存の法に対立するような法律はいずれも、こちらの国々に相容れなくとも、どこか別のところでなら折り合いがつくものである。が、ひとりこの法律だけは、あらゆる法を向こうに回しているのだ。思うに、諸君の市民としての営為をつぶさに検討してみるなら、この法律をもっとしっかり吟味することになろう。将軍職、神官職、議決、ほとんどすべてと言ってよい、平時であれ戦時であれ、最善の行動はことごとく裁定者の吟味を心得ている。軍を指揮するのは審判者の認めた者であるし、神事を執り行うのは裁判官が保証した者だ。そして議決は、人々のあいだで審議されてこそ効力を持つ。戦争に勝利しても、裁定を待たないうちは報償に与ることがないのである。とすれば、何事であれ吟味する者を待つというのに、ひとりこの法律だけが裁定者の票決を拒むとは、どうして矛盾した話にならないだろう。

「たしかに。だが、姦夫の犯す罪は大きい。」

何を言う。人殺しの罪は、より甚大ではないか。裏切り者を、ほかの罪人ほどでないと見てよいのか。神殿荒らしは、裏切りを働く者より軽いだろうか。それでも、これらの罪で拘束された者たちは裁定者を待つ。裏切り者も、裁判官が票を投じない限り罰を受けることはないし、人殺しもまた、告発者が事件を立証しない限り処刑されはしない。神々のものをくすねた輩も、それが裁定者の知るところとなるまでは刑に服さないのだ。一方で裁定者のもとでより大きな罰が課せられ、また裁判官が票を投じない限りそれぞれがその罪だと見なされることもないというのに、ひとり姦夫のみが詮議を経ないで殺されるとは、じつに理不尽なことではないか。ほかより引けを取っている分だけ、むしろ誰より裁きが必要だったはずなのに。

「それで、姦夫を殺すのと裁判官に引き渡すのとで、いったい何が違うというのか。どのみち死を引き受けることに変わりないのなら。」

独裁者と法律の分だけの差、民主制と専制の分だけの違いがある。望みの者を始末するのは独裁者のすることだが、罪有りとされた者を適正に殺すのが法律のあり方だ。また、かたや市民は議会で検討する事案をなべて吟味に付すけれど、独裁権力のほうはといえば、断罪はしても、よく詮議することがない。この二つながらのことを、市民および法律は、独裁を敷いて専横を目論む者とはいちいち反対に行ってきたのだ。とすれば、姦夫を始末してしまうのと裁定者に引き渡すのとでは、どうして違わないことがあろう。さらに言うなら、みずから姦夫を殺めた者は自身を罪人に対する力の行使者とするが、かたや裁判官に引き渡した者は法廷を罪人の主とする。裁定者が力を振るうほうが、告発者がそうなるよりも、より穏当なはず。しかも自分で姦夫を殺害した者は、ほかの理由で殺したのではと疑われもするけれど、審判を委ねてしまった者のほうは、ひとえに正義を求めたものと受け取られるのである。

「たしかに。だが、その場で命を落とすほうが、より厳しく罰せられたことになる。裁判までの時間が得になるのだから。」

その反対を、裁かれる者は味わうことになる。それ以降に生を送るのは、より辛いはずなのだ。身に受けることを予期するのは受けてしまうよりずっと恐ろしく、報復が引き延ばされるのは刑罰の付加と映るだろう。死を思う者は幾度となく死ぬのであるし、試練への不安はいっそうの恐怖となる。だから、その場で死んだ場合、姦夫は何も感じずにいられるのだ。報復の早さが、知覚を欺くことになる。思惑より先に訪れる死は痛みを伴わないが、かたや何度も予期され、一度きり実現するそれは、不安でもって報いを倍加するのである。考えてもみよ、もっと互いを突き合わせたうえで。自分の手で姦夫を殺めた者は、その報復の証人をまったく持たないことになるけれど、裁判官たちに引き渡した者のほうは、多くの人々を懲罰の観衆とする。大勢の見物人のもとで執り行われるのは、より苦痛を伴う報復のやり方だろう。また、人知れず死んだのでは姦夫たちを利することにもなる、恨みのせいで死んだのではとの疑念を、多くの者に残すだろうから。かたや裁判官たちのもとで事件が

立証されたなら、争う余地のない罰を引き受けて死ぬことになるというのに。したがって、裁判官に引き渡されるより、うやむやなうちに死ぬほうが、むしろ姦夫自身には具合がよいのである。

姦夫はおぞましい。悪事のうちでもまったく度が過ぎている。なればこそ、まずは有罪の宣告を受けよ、しかるのち死に赴くがよい。裁きの前に罰を受けるより、むしろ審判を受けるのだ。こうして姦夫が始末されるなら、子供の出生はよりはっきりするだろう。姦夫たちが世を去れば、以後それは誰の子かと問題にする者もないはずだから。万人の本有する性がなせる不正。ゆえに、起きてしまったことを、公の票決が断罪すべきなのである。私は懸念するのだが、姦夫は、それと知られず殺されることで、多くの同類を残すことになるのではないか。なぜ殺されたのかを知らないせいで、ほかの輩までがその気になってしまうだろう。罰したはずが、被害の終わりならぬ始まりともなりかねないのだ。